ハンドボールのゲーム分析
－フローターの評価について－

村山　明夫（中学校課程・保健体育専攻）

［序論］研究動機・目的・方法

本研究では、ハンドボール競技におけるフローターの運動行為を明らかにするために、第１２回アジア競技大会（広島市）と第１６回東日本学生ハンドボール選手権大会（青森市）の試合をＶＴＲに収録した。そして、その中からユン　ギョンシン選手（韓国ナショナルチーム、左利き）と、芹沢賢治選手（國士館大学、右利き）の二人に注目して、彼らのプレーを量的、質的の両面から分析した。これにより、二人のプレーの成り立ちを明らかにさせると共に、ゲーム分析の有効な方法を模索するものである。

［本論］第一章　ハンドボールのゲーム分析とは

球技論的にみると、プレイヤー個々人の競技能力はゲームの中で最も明確に現れるといえる。それを把握し、発展させていくためには、客観的な競技力診断を可能にする、ゲーム分析が行われなければならない。

この章では、ハンドボールのゲーム分析がどのような方法を用いて行われてきたかを、G,Stichler、H,Döbler等に依拠して明らかにした。それと対照的に、我が国におけるゲーム分析は、河村等の論文やランニングスコアに代表されるように、運動行為の結果を数量的に捉えていく傾向が強い。これは、非常に客観的で、説得力のある分析法であるといえるが、運動がどのような経過で行われたかは、明らかにされない点が指摘される。

第二章　運動学からみたハンドボールのゲーム分析

Meinelは、運動行為の経過を質的に明らかにする際に、印象分析が有効であると述べている。これは、目前で行われる運動をありのままに記述していく方法であるが、ハンドボールに対する優れた“眼力”を有した観察者が、被験者の運動に対して“共感”しながら行うことが前提条件となる。また、次の８つのカテゴリーが、運動の質を観て印象分析を行う際の拠り所となる。

①運動の局面構造　②運動のリズム　③運動の伝導　④運動の流動
⑤運動の弾性　⑥運動の先取り　⑦運動の正確さ　⑧運動の調和

これらは、それぞれが独立しているものではなく、互いに有機的に絡みあって、一つの運動徴表のなかに存在している。そして特に、運動の局面構造、運動のリズム、運動の先取りの３つを重要視して取り扱った。

第三章　ハンドボールのゲーム分析の実際

ランニングスコアを基に、数量的分析を行った結果、勝ち試合におけるフローターのロングシュートの成功率は40､5％であり、負け試合が26､8％であることや、カットインシュートの本数が勝ち試合は56本であるのに対し、負け試合は28本であった。そして、この数値を基に有意検定を行った結果、フローターのシュートが試合の勝敗を左右する要因なることが、明らかになった。

この章では、広島アジア大会におけるユン選手と、東日本インカレにおける芹沢選手のセット攻撃時におけるシュートに着目し、それらを実際に数量的、質的に分析を行った。

数量的分析の結果、明らかにされたことの例として、ユン選手の攻撃成功率が48､9％（中国・クウェート・日本戦の３試合）、芹沢選手の攻撃成功率が43､9％（決勝トーナメント）を示していたことが挙げられる。これは、両選手が非常に優れたプレーヤーであることの証明となるものである。

質的分析では、両選手の成功プレーの典型例をそれぞれ３つずつ選び出し、ＶＴＲと私案の観察用紙を用いて、印象分析を行った。その結果、フェイントやジャンプに運動リズムの変化や、先取り動作による運動局面の融合が顕著に認められ、運動学的に調和がとれた無駄の少ない、優れた運動であることが確認された。

［結論］

本研究では、数量的分析と質的分析を用いて、ユン、芹沢両選手のプレーヤー分析を行った。その結果、ゲームにおける２人の運動行為の構造を、明らかにすることが出来たといえる。また、その中でも運動の成り立ちを把握させる印象分析の意義は深く、“どのようにして”運動が行われているかを知ることにより、その質を見極めることが可能となる。

このことは、試合のみならず、日常の練習段階において、さらに重みを増すといえよう。何故ならば、練習においては運動の質に関心が寄せられ、それが評価の対象にされていることは、誰もが認めざるを得ない事実だからである。

ゲーム分析は、数的なデータと印象分析とを補完させながら行われることが最も望ましい方法であるといえよう。　－引用・参考文献省略－